
死神くんと栞ちゃん

たすく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死神くんと栞ちゃん

【Nコード】

N7812Y

【作者名】

たすく

【あらすじ】

自サイトより転載。

2000年ぐらいに書いたものらしい…クロス物で、栞が死亡 死神くん登場みたいなお話。

(・・・)

(・・・)

(・・・あれ?)

(私・・・確か病院のベッドで寝ていたと思ったけど・・・)

(ああ・・・そうか。私、死んじゃったんだね。)

(お父さん・・・お母さん・・・お姉ちゃん・・・ごめんね・・・)

(一度でいいから、お姉ちゃんと一緒に学校行きたかったな・・・)

(・・・)

(・・・)

(・・・これから、あの世に行くんだね、私。)

(・・・でも、あの世って、どうやって行くんだろう?)

「迎えに来たぜ」

空中に浮いていたパジャマ姿の少女は目の前の子供の出現に驚いた。自分と同じように空中に浮いている子供。

「・・・えと、迎えに来たとか言いましたけど・・・」

「ん？ ああ、自己紹介が遅れたな。俺はこう言う者さ」

目の前の子供は懐から一枚の紙を取り出して、少女に差し出した。
「名刺・・・ですか・・・」

受け取った名刺を見る。そこにはこう書かれていた。

【霊界行政機関靈魂取扱官庁・死神 No. 413 霊界三・六B
(TEL) 13 - 4444】

少女の目は大きく見開いた。

「し・・・死神・・・さん・・・ですか？」

「そう。俺は死神だよ」

「そう・・・ですか。私本当に死んじゃったんですね・・・」

「ま、正確には違うけどな」

「へ？」

「君の頭の上につつすらと見えるだろう？ 管みたいな物が」

「はあ、確かにありますね」

「これは君と君の肉体をつないでるもののさ。これが切れてはじめて死ぬのさ」

「じゃ・・・じゃあ・・・私まだ生きているんですね!？」

「まあそう言う事かな？ 下見てみなよ」

少女は足元を見た。

病室。

白衣を着た医者が何か叫びながら、看護婦に指示をしている。少女の体には色々な管がつながれていた。その近くには・・・

「栞！ しおり――――！！！！！！」

泣き叫ぶ叫ぶ少女の姿があった。

「・・・！ お姉ちゃん！！」

栞は言葉を失った。目には涙を溜める。

「よくわかったかい？」

「・・・・・・」

「ちよつと酷だったかな」

「・・・・・・死神さん」

「何かな？」

「どうやったら、私生き返れますか！？」

死神の襟元に掴みかかる栞。

「ぐ・・・苦しい・・・」

「お願いします！ 私、生きたいんです！ 生き返らせてください

！！」

「く・・・苦しい・・・ はなし・・・て・・・」

「あ」

顔が青くなっている死神。栞は手を離した。

「ごめん・・・なさい・・・」

「はぐ。苦しかった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「栞ちゃん」

「はい」

「君の生きたい意思はよくわかった」

「はい」

「でも、俺では君を生き返らせることは出来ないんだよ」

「な・・・!」

「俺の仕事は魂を霊界に運ぶこと。それ以外は勝手にできないんだよ」

「それじゃ・・・何のために・・・私の前に来たんですか・・・?」
涙ぐむ栞。死神は困った顔をしている。

「ごめんよ」

「謝られてもどうにもなりません・・・」

「栞ちゃんの場合は『誤死』と言ってね、たまに起こるんだよ・・・」

「ごし?」

「うん。こればっかは主任に許可を得ないとなあ・・・」

「しゅにん?」

「俺達死神を束ねる主任さ」

「人間の会社みたいですね」

「まあ・・・そうだけど・・・じゃ、栞ちゃん行くよ」

「主任さんの元ですか?」

「霊界へ」

そついうと死神と栞の姿は消えた・・・

栞は気がつくと、雲の中にいた。

（ここが・・・霊界・・・ですか。）

死神と共に雲の間を進んでいく。そして、雲に囲まれた大きな部屋が現れた。

（雲の中に・・・部屋ですか・・・）

その部屋の中央に机があり、誰かが座っていた。机の上には『主任』と書かれた立て札がある。傍らには巨大な漆黒の鎌が立てかけてあった。

（・・・・・・・・！！！！！！）

栞の目は大きく見開いた。

彼女の前には黒い布をかぶった髑髏。漫画や小説に出てくるような死神、そのままだ。

「し・・・・・・・・死神・・・・・・・・？」

栞は気がつかなかったが、栞の前に現れた死神と同じような格好をした人たちがいた。

「さすが主任」

「有名人だなあ・・・」

「俺達、名刺出さないと信用されないんだもんなあ・・・」

「うんうん」

勝手なことを言っていた。

「で、主任」

「ん、ちよつとまで」

そついうと主任は机の上のパソコンを叩く。

（あの世にもパソコンなんてあるんですね。）

は、と感心する栞。

「うむ。美坂栞の死亡はかなり先になっているな」

「やはり『誤死』ですか・・・」

「ところで『誤死』ってなんですか？」

先ほどから疑問に思っていた事を聞いてみる。

「死んじやいけない人間が、何かのひょうしで魂が肉体から抜けてしまうことなんだよ」

「はあ、そうなんですか」

(あ．．あれ？ この声お姉ちゃん．．．？)

(私、助かったの．．．？ それとも夢だったの．．．？)

意識がはつきりとしていく栞。

「もう峠を越えたようです。 もう大丈夫でしょう」

医者の方が聞こえた。

「しゝおゝりいゝ」

泣きじゃくりながら、ベッドの上の栞に抱きついている香里。

(．．．．お姉ちゃん．．．．)

(．．．．．．．．ありがとう．．．．お姉ちゃん、祐一さん．．．．
そして．．．．死神さん．．．．)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7812y/>

死神くんと栞ちゃん

2011年11月23日11時52分発行